

ちの を 編む

2017年1月15日(日)
会場:ピアノマン(ベルビアB1F)

ゲスト

桑原康介

Kousuke KUWABARA
株式会社桑原商店to+代表

東京都出身。大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレで様々なアートプロジェクトや運営、商品開発、観光事業のマネジメントに従事。瀬戸内国際芸術祭、いちほらアート×ミックスにも携わる。2013年、家業の酒販店を母体とした会社の後継者として入社し、アート・デザイン関連の事業を新設。2015年、gallery to plusを東京・自由ヶ丘に開設。農林水産省6次産業化中央サポートセンタープランナー、茨城県北芸術祭ゼネラルマネージャー。

アートは人を巻き込む力がある

(ゲストトークより)

自分がわくわくする取り組みをしている。それぞれの立ち位置の専門分野の人と一緒に、クリエイティビティを発揮するプラットフォームをつくることを意識しながら、調整役・仲介者として活動している。言い換えると常に板挟み。「KENPOKU ART 2016(茨城県北芸術祭)」では地域の方が積極的に動き、アーティストの制作に携わるようになり、既存の枠を超えたコミュニティが生まれた。これからの時代は独創的なアイデアが鍵。アートはそのヒントを与えてくれる。アートを通して新しい価値観や見過ごされてきた魅力が発見でき、様々な人を巻き込む力がある。地元の人がアート作品の制作に携わる際に、自らが持つ専門的な技を発揮したり、そこに住んでいる視点でおもしろい見方などを教えてもらえるとうれしい。「アートハッカソン」という考え方。いろいろな出自の人たちが一堂に会してチームを作り、地域の勉強をする。何をしたらおもしろいかディスカッションして新しいものづくりをしていく。こういった手法をもとに、産業・農業を考えると思いもよらないものができるかもしれない。あるものを活かしながら、そこに様々なアイデアをインストールすることで地域が元気になるきっかけが生み出されていくと思う。



地域のファンをつくっていく

(参加者のクロストークより)

参加者 船頭さんと漕ぎ手。漕ぎ手をあつめるマジックは？

桑原 明るく楽しく率直に話をしていく。大きなカテゴリーでくらず一人ひとりと向き合ってやっていく。自分の地域のなかで活動が行われている、という観点で地域のファンにつなげていく。

北原 茅野はキャパシティのある土地になりつつあると思う。若い人ががんばっている人が多くなってきた。みんないろいろ思いながら地域とかかわってこうとしている。

八木 茅野市民館の設計中に開催された計画策定委員会では市民たちと何度でも何時までも協議を重ねた。宮本常一さん著の「忘れられた日本人」に出てくる「寄り合い」を再現したかのような感じだ。茅野にはそういう気質が今でも残っていると思う。

参加者 棒寒天をつかった秋田のイベント「寒天博覧会」を茅野でもやりたいと妄想。秋田と茅野で交流重ね、棒寒天を通じて食文化だけでなく観光振興や移住、全体を元気にするつながりにできたらと考えている。

参加者 競争原理で棒寒天がなくなったら、絶やしちやいけいなあと感じた。ここでなければできないもの。茅野でしかない風景。地元の人に棒寒天があることを伝えていきたい。

桑原 棒寒天のおいしさや、素材としての可能性を、様々な属性の人たちとのヒアリングやディスカッションをして、新しいマーケットに向けた商品づくりをしていく必要がある。おもしろい仕掛けや愛情を持って丁寧に作ったものは、必ず伝わっていくと思う。

